

経済・金融 フラッシュ

10月マネー統計： 投資信託が3か月連続の前年割れ

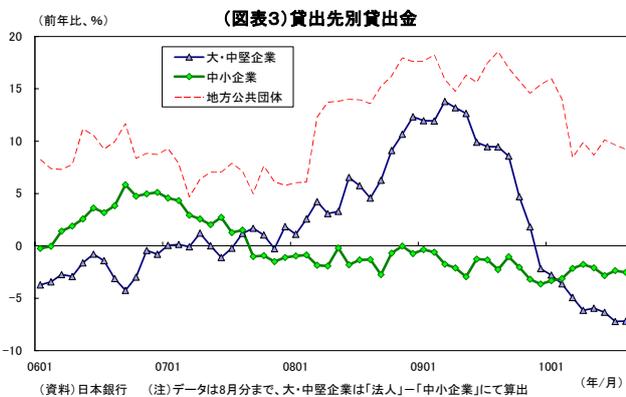
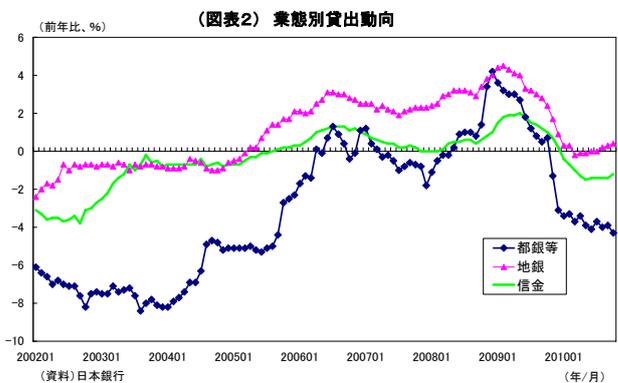
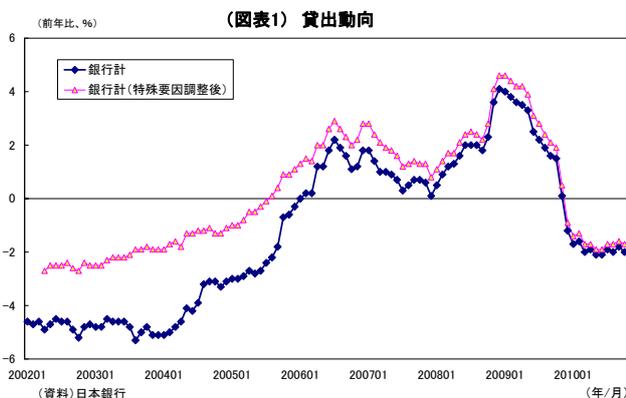
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向：都銀のマイナス幅が拡大

日銀が発表した貸出・資金吸収動向等によると、10月の銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は▲2.0%と、前月の▲1.8%からややマイナス幅が拡大し、11ヶ月連続の前年割れとなった。ここ数ヶ月は▲2%前後での推移が続いている。

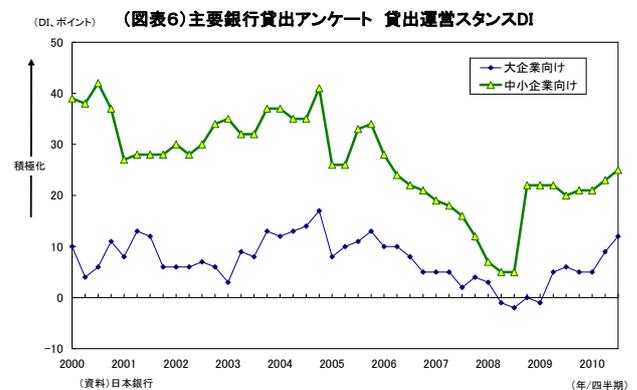
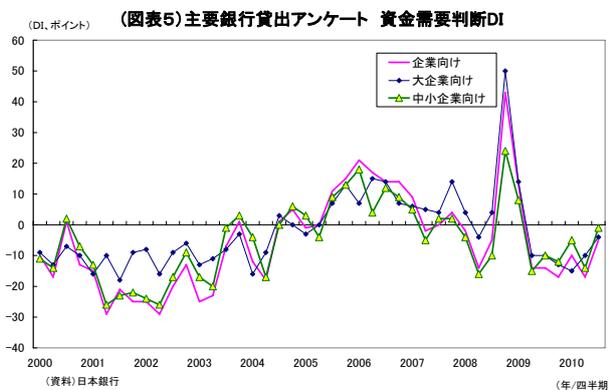
内訳では、地銀(第2地銀含む)が前年比0.4%増とかなりプラスを維持している一方、都銀等は同▲4.3%とマイナス幅が拡大、貸出残高が未だ下げ止まっていない。引き続き企業の資金需要低迷が響いている(図表1~4)。



2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：資金需要減少に歯止めはかかっていない

主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2010年7-9月期の銀行から見た企業の資金需要増減を示す資金需要判断D.I.は前回から12ポイント改善の▲5となった。資金需要の減少ペースは緩やかになったものの、依然底打ち・反転には至っていない。企業規模別では、大企業で▲4(前期比6改善)、中小企業で▲1(同13改善)となっている。減少要因としては、大企業では「資金繰りの好転」「他の調達手段へのシフト」を挙げる向きも多いが、企業規模を問わず「設備投資の減少」が顕著である(図表5)。

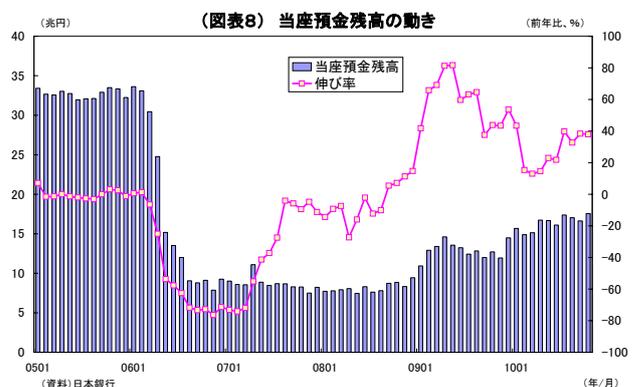
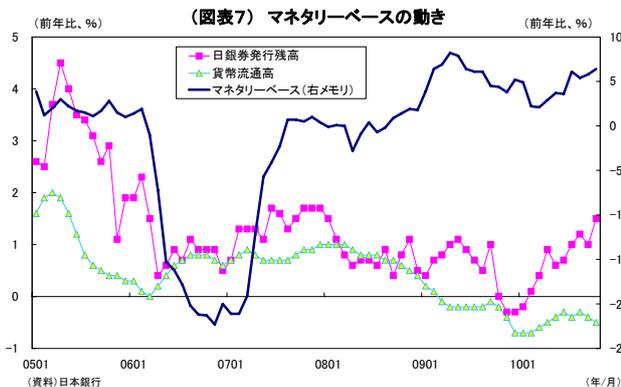
一方、銀行の貸出運営スタンスの変化を示す貸出運営スタンスD.I.は、大、中小企業ともに改善、プラスを維持しており、引き続き貸出運営を積極化しているとの結果になった(図表6)。要因としては、「成長分野への取り組み強化」(今回新設)を挙げる割合が高く、日銀の「成長基盤強化に向けた資金供給」が銀行の貸出運営積極化に影響を与えているようだ。



3. マネタリーベース：今後も高水準を維持する見通し

日銀による資金供給量を示す10月のマネタリーベースは前年同月比6.4%増と、1年4ヶ月ぶりの高い水準となった。前年比プラスは26ヶ月連続で残高自体も増加基調にある。日銀が潤沢な資金供給を続けたことから、日銀当座預金残高が同38.0%増(前月は38.4%増)と高い伸びを示した。

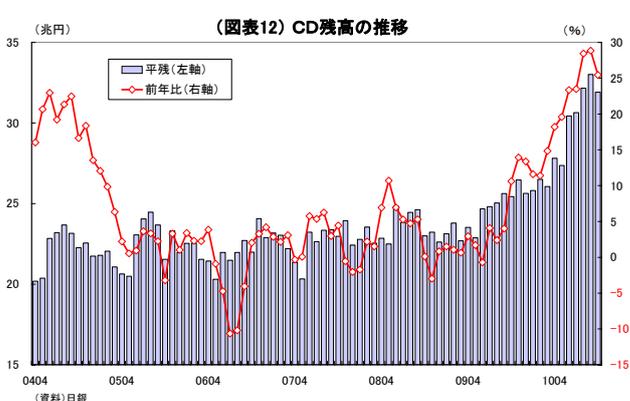
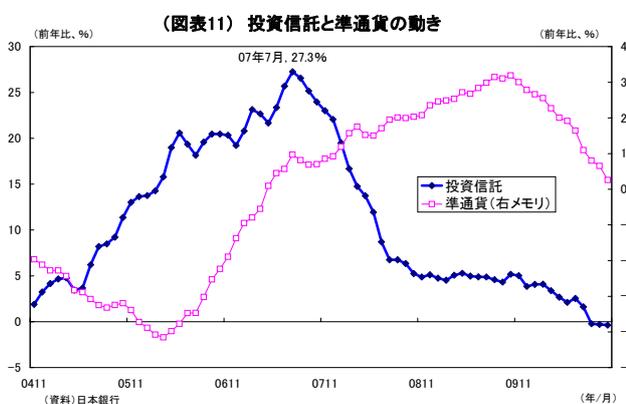
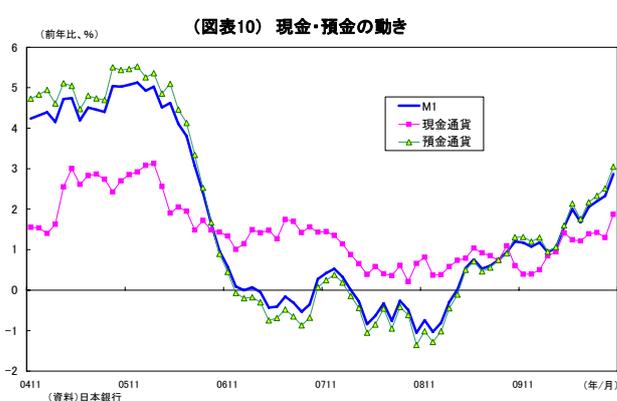
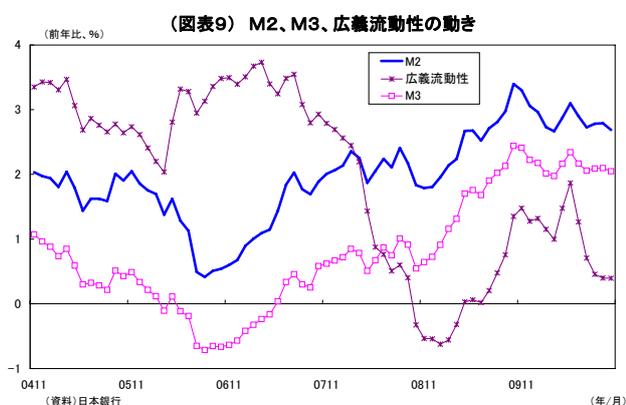
日銀は8月に新型オペの拡充を決定、10月に実質ゼロ金利の導入と資産の買い入れを含む追加緩和策を決定するなど、金融緩和姿勢を強化してきている。今後もこの効果が現れてくることから、マネタリーベース残高は引き続き高い水準で推移していくとみられる(図表7,8)。



4. マネーストック： 投資信託が3カ月連続の前年割れ

通貨供給量の代表的指標である10月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年同月比2.7%増（前月は同2.8%増）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同2.0%増（前月は同2.1%増）とそれぞれ増加した。引き続き定期預金など準通貨の伸び率が低下する一方、預金通貨（普通預金など）やCD（譲渡性預金）といった流動性の高い資産が高い伸び率を示した。

一方、M3に投信や外債などを含めた広義流動性の伸びは0.4%（前月改定値も同じ）とわずかなプラスに留まり、引き続きM2、M3との乖離が大きい。内訳として特に注目される投資信託については対前年▲0.4%（前月改定値は同▲0.3%）と3カ月連続のマイナスとなり、マイナス幅も拡大傾向にある。金融緩和で供給されたマネーは、銀行では国債に向かい、民間非金融部門では流動性の高い安全資産に向かっている（図表9～12）。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。